

看護の道への決意新たに。 ナーシング・セレモニーを開催。

2024年1月20日(土)、アニー・ランドルフ記念講堂にて「2023年度ナーシング・セレモニー」が開催され、看護学部第1期生105名が看護の道への決意を新たにしました。セレモニーは礼拝として行われる第一部と、学生主体で進められる第二部で構成されていました。そこで、セレモニーの企画・運営から当日の進行まで携わったナーシング・セレモニー学生実行委員の永田絢女さん、伊東早織さん、中西晶子さんに、セレモニーに込めた想い、今後の抱負などを聞きました。

誓い胸に、医療現場での看護学実習へ。

ナーシング・セレモニーは、初めての病院実習を前に、看護の道へと進む自覚と覚悟を新たにするセレモニー。厳粛な雰囲気の中、賛美ではクワイアの方々と共にマザー・テレサの日々の祈りと言われている「私をお使いください」を捧げました。歌詞の「必要としている人に、私の手、足、声、そして心を差し出して、他者を助けたい」というフレーズと、患者さんに寄り添う看護をめざしている私たちの志が重なりました。誓いの言葉では、みんなで考えた言葉を1期生全員で唱和。その一言ひとことを胸に刻み、これからの看護の道を一生懸命歩いていくことを誓いました。

続く第二部では、学生一人ひとりの「看護への誓いの言葉」や学内での演習風景を映像で紹介。ご家族や教職員の皆さまに見守られながら記念品贈呈や写真撮影を行い、セレモニーは終了しました。準備がはじまった時から、お昼休みに何度も集まっては、話し合いを重ねてきました。式当日まで共に協力してくださった看護学部の先生方に心より感謝します。

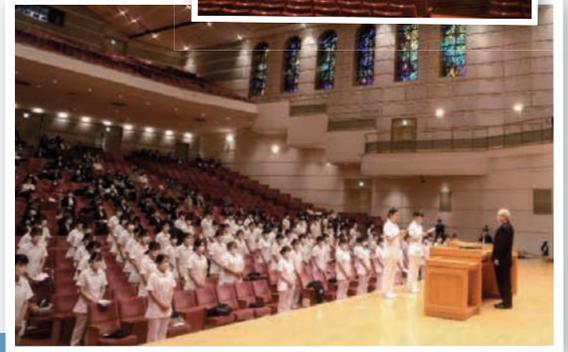


学内での実習風景

誓いの言葉

私たちは、看護への道を歩むにあたり、
金城学院大学の教育理念である「強く、優しく。」を胸に、
生涯を清く過ごし、すべての人々への「隣人愛」をもって、
私たちの任務を忠実に^{つとめ}行うことを誓います。

2024年1月20日



ナーシング・セレモニーは 看護師人生の中で一度きりのセレモニー。

永田絢女さん(学生実行委員長/3年生)

ナーシング・セレモニーは、金城の看護学部にとっては初の開催。自分たちの好きなように企画していいと聞き、やりがいがありそうと思って手を挙げました。実行委員は総勢11人。2年生の春に委員会を立ち上げ、企画・準備を進めてきました。式の当日は進行役も務めていたのですごく緊張しましたが、このセレモニーは看護師人生の中でも一度だけの大切な儀式。貴重な経験ができました。今後は病院実習が多くなりますが、実践力を身につけ、患者さん一人ひとりの個性を大事にした看護を提供できるよう、精一杯努力します。

みんなの成長を感じたセレモニー。

伊東早織さん(学生実行委員/3年生)

準備を進める中で1番苦労したのが校歌斉唱。校歌を知らない学生がほとんどで、集まって練習する時間もなかなか取れない。そこで、考えたのが、お昼休みの時間に毎日校歌を流して、耳から覚えてもらう方法です。本番では、校歌も誓いの言葉も全員の声がかみ合って、感動しました。入学した時と比べて、みんなすごく成長したなって実感しました。病院実習の際に行った援助で、患者さんがとても喜んでくださったことがありました。知識も技術も未熟な私にも患者さんに来ることがあるのだと感じ、より良い援助を行えるよう、もっと勉強していきたいと思いました。保健師を目指して勉強していますが、実習を通して看護師もいいなと思ったので、悔いのない選択ができるよう、考えていきたいです。

看護の道を選んでよかったと思えた病院実習。

中西晶子さん(学生実行委員/3年生)

セレモニーが終わった時は、責任を果たせたという開放感でいっぱいでした。後日、写真でみんなで灯したキャンドルの灯を見ていたら、私たちはこれから病院実習に出て、看護師になるんだという実感がじわじわ湧いてきました。先生方の協力もあって、金城としては初のセレモニーをとってもいいカタチで終わることができたと思います。2月の病院実習は緊張の連続でしたが、退院する患者さんから「あなたのおかげで楽しい入院生活だった」と言われ、そのひとことで、看護の道を歩んだことは間違いないなと実感しました。



愛され、育ちあう。 ～異年齢保育の中で育ちあう～

金城学院幼稚園では、1976年から異年齢混合クラス編成が導入されています。現在も3歳児から5歳児までの子どもたちが、同じクラスで日々の生活を共にしています。3学期には満3歳児も加わり、4学年で過ごすこともあります。発達に大きな差のある幼児期ですが、異年齢の友達の中で遊び、生活することで、年上児・年下児が互いに育ちあう経験を積み重ねています。

ようこそ年少さん。なかよくしようね♪

今年度も4月に新しい年少さんを迎え、進級した年中さんや年長さんたちがお手伝いをしてくれています。初めての環境に戸惑い、保護者と離れる寂しさに涙を流す年少さん。すると年上児が、すかさずティッシュをもって駆け寄り「どうしたの?」「寂しくなっちゃった?」「大丈夫、みんないるからね」「ちゃんとお迎え来てくれるよ」と声をかけてくれています。身支度の場面では、「(出席)シールはここに貼るのよ」「水筒の場所はここ」「お外に行くときは帽子がいるよ」と。お片付けの時にも、「もうお片付けの時間だよ」「ハサミはここにに入れてね」「お部屋に戻るよー」と、まるで小さな先生のように年下児を支えています。そのように声をかけてくれる背景には、きっと一年前、二年前に自分も同じようにお兄さんお姉さんに声をかけてもらい、嬉しかった経験があるからでしょう。

年上児も年下児も、 みんな生活を共にしている仲間。

もちろん、保育者が年上児に年下児のお手伝いをお願いすることもあります。でも、多くの子どもたちは自分たちで友達が困っていることに気づき、どうしたら良いかを考え、自分の意志で関わっていきます。目の前にいる友達は、登園してから、自由遊びの時間、クラス活動の時間、食事支度も、「さようなら」のその時まで、“生活を共にしている仲間”です。一緒に過



チャックが…。
最初がむずかしいよね。
手伝ってあげる。



ぐず時間が、相手を理解しようとする力、助けてあげたいという思いを育てているのだと思います。一時的な交流ではなく、生活を共にする、必然的に関わりを持つ環境の中だからこそ、小さな年下児の存在が、お兄さんお姉さんを成長させてくれているのだと感じています。

“一緒にやろう”の積み重ねが、 子どもの育ちあいを深めていく。

遊びの中でも、異年齢の関わりはいたるところで見られます。どろ団子が上手く作れない年少児がいると、年中児が隣で作って見せ、丸く作るコツを伝授してくれたり、氷鬼やドッジボールのルールが曖昧な年中児には、年長児と一緒に遊びながらルールを伝えてくれたりしています。折り紙のリボンを頭につけた年長児を見て、「わたしも欲しい!」という年少児に、「今日は作ってあげるけど、次は一緒に作ろうね」と応える年長児の姿もありました。この“一緒にやろう”が年下児の中に積み重なって行き、自分たちが年上児になったときに次の年下児との関わり基となるのでしょうか。

これからも神さまに愛され、ともに育ちあうキリスト教保育を大事にしていきたいと思っています。



ら、自由遊びの時間も、クラス活動の時間も、食事支度も、「さようなら」のその時まで、“生活を共にしている仲間”です。一緒に過

三輪車は向こうにかたづけるんだよ。
一緒に行こう!





沖崎学先生による特別講義『9つのステンドグラス物語』が開かれました。

4月26日(金)、宗教主事の沖崎学先生による特別講義『9つのステンドグラス物語』が開かれました。参加したのは、生徒会執行部の鄭朱雅さん、高木ひかりさん、近藤梨瑚さんの3人。現在、金城学院高校には8つのステンドグラスがあり、そのひとつ一つに歴史や物語があることを知り、金城が神さまの愛であふれていることを実感しました。ここではその一部をご紹介します。



金城の“これまで”を引き継ぎ、“これから”につなげる希望の光。

地塩館2階のメディアライブラリー(正面入り口)にあるステンドグラス。独特のアーチ形は榮光館からインスパイアされたもので、色は榮光館のステンドグラスに合わせています。榮光館の直線形を現代的に、流線形にしつつ、天地創造から流れてくる、神さまの愛である青い水が、礼拝を守る榮光館から、友と交わり、学びを深める地塩館へと流れ出しています。



地塩ちゃんのポーズをとる3人。

よく見ると、金城生である“地塩ちゃん”が、両手両足を伸びやかに広げ、前に向かっての姿が描かれています。



榮光館3階の小礼拝堂のステンドグラス。水を表す青色が上から下にいくに従って広くなり、黄色の乾いた土の上を潤していきます。生い茂る緑の中には、真っ赤な大輪の花が咲いています。

榮光館1・2階の階段の吹き抜けのステンドグラス。小礼拝堂から湧き出した水が大河となって大地を潤し、その隙間をぬって緑色の植物が広がり、赤い花を咲かせています。

榮光館のステンドグラスは2つで1つ。

榮光館には2つのステンドグラスがあります。1つは3階の小礼拝堂に、もう1つは榮光館1・2階の階段吹き抜けのところに設置されています。どちらも榮光館の西側にあり、連続しています。モチーフとなっているのは、聖書の創世記1章の「天地創造」。神さまの愛が青色の水となって、この世界に流れ出ていくさまを、詩的なデザインで表現しています。

密かに物語を語る、9つ目のステンドグラス。

現在、最後の9つ目のステンドグラスの完成を目指して計画が進行中。設置場所は世光館。そこには“榮光ちゃん”と“世光ちゃん”が登場します。“地塩ちゃん”と合わせて3人。そうです。金城は135年前に3人の生徒から始まったという物語を、9つ目のステンドグラスがこれから密かに語るのです。

金城のステンドグラスは神さまの愛。私たちはいつも神さまの愛に包まれている。



左から高木ひかりさん、鄭朱雅さん、近藤梨瑚さん

榮光館のステンドグラスが神さまの愛だということを今日初めて知りました。私はあの下をよく通るのですが、夕方になると光が差し込んで、青色がすごく鮮やかになります。あれは神さまの愛で、私たちは愛に包まれているんだと思うと、あの下を通るのが楽しみになりました。榮光館の設立は先輩たちの募金活動から始まったと聞き、先輩たちの愛も感じ、自分が金城生であることを誇りに思いました。

高木ひかりさん
(3年生/宗教常任委員長)

私は毎朝、メディアライブラリーに来て勉強しています。ちょうど、このステンドグラスの真下に座って。そうすると、陽の光が入ってきて、ノートや教科書、机も青色に染まります。あの青い光は神さまの愛で、私たちはその愛を浴びながら勉強していると思うと、幸せな気持ちになります。作品の中に“地塩ちゃん”がかくれていることを知らない人も多いので、みんなにも伝えたいなと思います。

鄭朱雅さん
(3年生/生徒会長)

私は1年生の4月にYWCAに入部したのですが、初めてYWCAの活動をした場所が榮光館の小礼拝堂でした。その時に沖崎先生から、「榮光館の2つのステンドグラスはつながっている」という話を聞いて、感動したことを思い出しました。物語を知った上で2つのステンドグラスを見ると、本当に小礼拝堂から水が湧き出し、上から下へ流れていくように感じ、とても神聖な気持ちになります。

近藤梨瑚さん
(2年生/宗教常任副委員長)



本校生徒が読書感想文で最優秀賞、感想画で特別優良賞を受賞しました。

写真左から麓菜由子さん、後藤英一先生、志垣ちいさん



本校では、毎年夏に読書感想文と読書感想画を募集し、集まった作品の中から優秀作を選び、各種のコンクールに応募しています。2023年度は、3年生の志垣ちいさんが、昨年度中2在籍時に「愛知県私学読書感想文コンクール中学校第II類(ノンフィクションの部)」で最優秀賞を受賞。高校1年生の麓菜由さんが、昨年度中3在籍時に「第35回読書感想画名古屋市コンクール(毎日新聞社・各学校図書館研究会主催)」で特別優良賞を受賞しました。そこで、本校メディアライブラリーの責任者として生徒たちの読書活動を推進する後藤英一先生と、見事受賞を果たした志垣さんと麓さんに、読書への思い、本を読んで感じたことなどを聞きました。

読書感想文、感想画の提出は生徒の自主性に任せている。

かつては春休みの宿題として、生徒全員に読書感想文を書かせていました。しかし読書感想文は苦手という生徒も多く、それが重荷になって読書が嫌いになってしまう子もいました。本来、読書は自分の好奇心の赴くまま、楽しんで読むもので、強制されるものではありません。そんな考えのもと、数年前から読書感想文、感想画の提出については、生徒の自主性に任せようということになりました。

そうした中で、毎年何人かの生徒は感想文や感想画を寄せてくれます。本を繰り返し読み、感じたこと、心に残ったことを文章や絵で表現するのは簡単なことではありません。苦労して作品を仕上げたことだけでも評価に値しますし、ましてやこのような素晴らしい賞を受賞したことは、私たち教師にとっても望外の喜び。二人の快挙を誇りに思い、触発された生徒も多いと思います。

本と出会い、読書の楽しさ、喜びを知ってほしい。

10代は人生の中でも最も多感な時期。だからこそ、生徒たちにはもっと本に親しんで、世界を広げてほしい。そんな思いから、さまざまなことを試みています。図書委員の生徒たちに自分がお勧めする本のポップを書いてもらい、メディアライブラリーで紹介するのもそのひとつ。「恵愛祭」では、毎年メッセージを書いた本の葉を手作りして、来てくれた小学生たちにプレゼントしています。読書指導というよりは、本の世界に誘う種まきをしたり、土壌を耕すような作業の中で、生徒たちが好きな本に出会い、読書の楽しさを知って、やがて読書感想文や感想画の作成に自然とつながってほしいなと思っています。



第35回読書感想画名古屋市コンクール 特別優良賞

麓菜由子さん タイトル『本当に大切なもの』

ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』は私の大好きなお話。もともと絵を描くことが好きで、言葉では言い表せない感動を絵で表現したいと思ったことが、コンクール応募のきっかけです。絵を描くにあたって原作を読み返したのですが、文章が魅力的で読みやすく、引き込まれるように夢中で読んでしまいました。作画する上で困ったのは、小学生の頃に映画化されたものを何度も観いたので、映画のイメージからなかなか離れられなかったこと。自分の想像力、オリジナリティを大切にしたいので、自分のイメージが出来上がってからは、どんどん筆が進みました。夜中まで頑張って描いたので、受賞の知らせを聞いた時は本当に嬉しく、達成感を感じました。

読書の魅力は、なんと言っても、想像力を膨らませて本の世界に入っていくときのワクワク感。新たな気づきや発見もあって、自分の視野が広がります。



愛知県私学読書感想文コンクール 最優秀賞(中学校第II類)

志垣ちいさん タイトル『異常という普通』

私は本屋が好きでよく行くのですが、ある日、一冊の本のタイトルに目が釘付けになりました。そのタイトルは『普通という異常』。普段から私が思っていたことがそのままタイトルになっていました。というのは、私は小学校のとき、ADHD・ASDと診断され、社会の多数派を占める「普通」とは区別されて生きてきました。でも、作者(兼本浩祐)は言います。ADHDやASDを病と呼ぶのなら、「普通」も同じ様に病だ。たとえば、他人が自分をどう見ているか気になって仕方がない、「いいね」を得るためにSNSを過剰に利用するなど、定型発達の人の特長も病と言っているのではないかと。それは自信がなかった私に新しい世界を見せてくれました。

この世の中に普通も異常もない。だからこそお互いに尊重し、理解しあって生きていきたい。この本と出会ったことでその思いが強くなり、それを伝えていくのも私の役目かなと思っています。